

## 「下衆の勘ぐり」の極北：「動機」の理解をめぐる研究の展開

著者	津田 正太郎
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会志林
巻	65
号	4
ページ	19-36
発行年	2019-03
URL	<a href="http://doi.org/10.15002/00021818">http://doi.org/10.15002/00021818</a>

## 「下衆の勘ぐり」の極北

——「動機」の理解をめぐる研究の展開——

津 田 正太郎

### 1 なぜ「動機」が問題となるのか

人の心を覗くことはできない。

さまざまな実験や調査を通じて、心のありようを間接的に理解しようとする試みは無数に行われてきた。それでも、少なくとも現時点では、他者が何を考えているのかを完全に理解することは不可能である。だが、多くの場合、われわれの社会は他者の心が理解できるという前提に基づいて作動している。

たとえば、「なぜ人はそれをする（した）のか？」という理由づけは「動機」と呼ばれ、多くの人は他者のそれを理解できると考えている。動機の理解が特に求められるのは、他者の行動が予想外であったり、その意味を把握しづらい状況においてであると言われる（井上 1997: 26）。あるいは、重大な犯罪のようにその行動が深刻な帰結をもたらした場合、動機の解明は重要な課題として認識されうる。しかし、犯罪行為に限らず、他者の動機をどのように理解するかは、個々人がもつ世界観にとって重要な意味を有し、政治的な立場とも深く結びついている。

政治学者のコリン・ヘイは著書『政治はなぜ嫌われるのか』（2007年）のなかで、20世紀後半の英国で政治不信が急速に広がった理由の一つとして「政治エリートが建前では集合的な公共的利益を追求していると言いつつも、実際には党や自身の狭小な利益を追求しているとみられるようになったこと」を挙げている（ヘイ 2012: 50）。すなわち、政治家や官僚が国家や社会の集合的な利益ではなく、党や自己の個別的な利益の獲得を動機として行動しているとみなされるようになったことが政治不信へとつながった。そして、政治エリートがそのように利己的な存在でしかない以上、彼らの役割を可能な限り小さくする「小さな政府」の実現こそが望ましいとみなされるようになった、というのである。

別の例を挙げるなら、2015年のシリア難民危機のさなか、イラストレーターのはすみとしこは、実在するシリア難民の少女の写真をもとに「そうだ難民しよう」という見出しの入ったイラストを発表した（はすみ 2015: 26）。多くの非難を招いたそのイラストは、「安全に暮らしたい」という多くの難民によって抱かれているであろう動機を小さなフォントで綴ったあと、「自由に遊びに行きたい」「おしゃべりがしたい」というより利己的だとみなされやすい動機をより大きなフォントで記し、「贅沢がしたい」「何の苦勞もなく生きたいように生きていたい」という動機をさらに大きなフ

ォントで述べる。そしてその横にとりわけ大きなフォントで「他人の金で」という文字列が添えられている。そこから「そうだ難民しよう！」という見出しへとつながっていく。すなわち、他人へのたかりこそが難民の「本当の動機」だとする世界観のもとでのこのイラストは描かれているのである。ここまで極端ではなくとも、欧州における反移民感情の高まりの背景として、移住先の福祉に依存することを動機として移民や難民が押し寄せてきているという感覚の広がりがあることは数多く指摘されている<sup>1</sup>。

政治不信であれ、難民への誹謗であれ、これらに共通しているのは、きわめて利己的なものとして他者の動機を解釈しようとする態度である。一般的にそうした態度はシニシズムと呼ばれ、社会の内部の信頼を切り崩すものとして論じられることもある。シニシズムのもとでは、あらゆる人間、または攻撃対象とされた人間は狭隘な自己利益のみを追求する存在とみなされ、それゆえに自己以外の他者または公共の利益のために行動することなどありえないと想定される<sup>2</sup>。そうした利益を掲げる者は偽善者であり、その言葉を信じる者は愚か者でしかない。むしろ、偽善の背後に隠された自己利益を暴くことが真の人間理解へと到達するための方法とみなされる。

以上の点からも明らかなように、このようなシニシズムを研究する立場からすれば、主たる課題は「他者の動機」の解明ではなく、「他者による動機の理解」の解明であり、「そのような動機理解は何に起因しているのか」を明らかにすることである。言い換えれば、実際に他者がいかなる動機で行為をなすのかという問いは視野の外に置かれるのである。本論で見ていくように、とりわけメディア言説の分析などを行うさい、こうしたアプローチは有効性を発揮する。しかし他者の動機にかんする問いを放棄することには副作用を伴うのであり、近年ではその部分を問題視する議論も提起されるようになってきている。

本論の目的は、動機の理解をめぐるこうした理論的な展開を整理したうえで、近年において論じられるようになってきた他者の動機理解の必要性をその文脈に位置づけることにある。そこでまず、チャールズ・ライト・ミルズの「動機の語彙」論を出発点として、この議論が結果として動機の理解の放棄へと帰結していったことを論じる。次に、動機の理解を放棄することで得られた視座をとりわけメディア研究との関連性において紹介する。そのうえで、近年において論じられるようになってきた「他者の合理性」にかんする議論について、それがいかなる文脈のもとで浮上してきたの

---

<sup>1</sup> 実際には、EU圏内における移民の大多数は労働を目的としており、その就労率はホスト国の国民のそれよりも高く、彼らが受け取る福祉給付の総額はホスト国の福祉関連支出のわずかを占めるに過ぎないという調査結果が示されている（ICF GHK 2013: 203）。だが、マスメディアのセンセーショナルな報道により、そうした統計的なデータは容易に反駁されてしまう（津田 2016: 240）。

<sup>2</sup> なお、このようなシニシズムと懐疑主義（skepticism）との違いとして、後者は自らのものも含め、あらゆる知識が不完全なものだという前提のもと、より完全な知識を探求し続ける姿勢を指すとされる（カペラ／ジェイミソン 2005: 32-36）。すなわち、懐疑主義者は自らの意見が間違っている可能性を認める。対して、シニシズムは固定的な人間観に立脚し、それが誤っている可能性を認めない。「シニカルな人間は自分の意見を変えることがない」というのである（前掲書: 25）。

かを述べる。最後に、「他者の動機」の解明と「他者による動機を理解」の解明のいずれもが社会学またはメディア研究において重要な意味を有するものの、そこには非常な難問があることを指摘して本論の結びとしたい。

## 2 「動機の語彙」論をめぐる展開

「動機の語彙」論を語るうえで欠かせないのが、チャールズ・ライト・ミルズの論文「状況化された行為と動機の語彙」（1940年）である。上述のように、他者が予想外の行動、または理解し難い行動をとった場合、われわれの多くは「なぜそんな行動をとったのか」という動機を理解しようとする。ここでわれわれは、他者の内部に何らかの明確な動機が存在し、それに突き動かされて行動したという前提に立っている。しかし、ミルズによれば、動機とはそのように理解すべきものではない。この論文でミルズは「動機とは、個人の『なかに』ある固定的な要素というより、社会的行為者が行為の解釈を行うさいに用いる言い回し（terms）」として把握すべきだと主張する（ミルズ 1971: 345, 改訳）。すなわち、コミュニケーションのなかで選択的に語られるものとして動機を理解したほうがよいというのだ。

一例として、仁平典宏が論じるボランティアにかんする「動機の語彙」について取り上げてみよう。仁平によれば、ボランティアとは他者にたいして無償で何らかの恩恵をもたらすという意味で「贈与」と解釈される行為である（仁平 2011: 11-13）。しかし、このような贈与には「偽善ではないか」といった第三者から懐疑の目が向けられることが少なくない。場合によっては、「ボランティアと称して何らかの収奪を行っているのではないか」という疑念が提起される場合すらある。そうした疑念から逃れるため、たとえば1980年代には「なぜボランティアを行うのか」という問いに「楽しいから」「面白いから」という私的報酬を強調する「動機」が提示されるようになったという（前掲書: 334-335）。すなわち、これらの動機は、本人の内側から発せられたものというよりは、他者を納得させるために選択的に語られたものだと判断されうる。

この事例からも明らかなように、「動機の語彙」論の重要なポイントは、対象となる人物が実際のところいかなる動機に基づいて行動したのかという問いから視点をずらす点に求められる。ボランティア活動は本当に私的報酬を目的としているのか、それともやはり本音では困っている人を助けたいという利他的な動機に支えられているが、それを言うのが恥ずかしいので黙っているだけなのか。そうした問いを棚上げしたうえで、いかなる動機の語彙が語られているのかを提示し、それらの語彙が果たしている役割の分析が試みられるのである。そして、この点において「動機の語彙」論は、社会構築主義的な観点からの社会問題研究と強い親和性を示す<sup>3</sup>。

乱暴に言えば、社会構築主義の立場からの社会問題研究は、研究者に対してきわめて禁欲的な

<sup>3</sup> ただし、仁平の研究は社会構築主義とはやや異なるアプローチを採用しており（仁平 2011: 18）、本論ではあくまで「動機の語彙」論の利用例として参照した。

ることを求めるアプローチである。厳格な意味でこの立場に依拠する場合、研究者が「社会問題が実際にいかなる状況にあるのか」や「いかなる動機によって社会問題は提起されたのか」を論じることは禁じられるからである（キツセ／スペクター 1992: 150）。犯罪であれ、差別であれ、貧困であれ、その問題が実際にどこまで深刻な被害をもたらしているのか、その被害を訴える人びとの動機はなにかということの分析のなかに組み込んではならない。研究においてなされるべきは、個人や市民団体、専門家などが展開する「クレーム申し立て活動」によって社会問題がどのように構築されていくのかを明らかにするという作業なのである。

社会問題を研究するというその目的からすれば奇異にも感じられるこのアプローチの詳細についてはすでに多くの著作や論文で論じられているため、ここでは繰り返さない<sup>4</sup>。本論において重要なのは、このアプローチに立脚する場合、たとえば難民自身による苦境の訴えと、他人へのたかりこそが難民の本当の動機だとする主張とが「クレーム申し立て活動」という平面において等価だとされる点である。

一面においてこれは、人びとはなぜクレームを申し立てるのかという動機理解にまつわる難問から研究者が解放されることを意味している。それはまた、「社会問題が実際にいかなる状況にあるのか」を問わないという社会構築主義アプローチのもっとも重要な特徴とも結びついている。これらの負荷から解放されることで、構築主義の立場にたつ研究者は、さまざまな社会問題の分析を行うとともに、自身の価値観やイデオロギーがそこに混入するのをかなりの程度まで防ぐことができる。要するに、より客観性のある分析が可能になるのである。逆に言えば、動機の語りの正誤を判断しようとする場合、他者の心が理解できるということだけでなく、動機の語りを生み出す原因となった問題の存否や実情について把握できるという前提に立脚せざるをえなくなる。その負荷が小さくないことは明らかである。

ところで、「動機の語彙」論を提起したミルズはその後、ハンス・ガースとの共著『性格と社会構造』（1953年）のなかで、そのさらなる展開を試みている。ミルズらによれば、社会は人間に何らかの役割を与えることで、彼らのもつあいまいな衝動を特定の方向へと誘導し、その統制を図ろうとする（ガース／ミルズ 1970）。その誘導の手段として用いられるのが言語であり、とりわけ動機の語彙である。特定の動機の語彙が肯定的なものとして語られ、人びとがそれを内面化していけば、社会統制は成し遂げられるという。そのメカニズムとしては、動機の語彙が G. H. ミードの言う「一般化された他者」を構成し、個人はその「他者」との内的対話を通じて社会的に受け入れられそうな動機を語るようになると想定されている（前掲書: 131-132）。しかも、そのように承認された動機の語彙は、それによって説明される行為を促進する一方、承認されないような動機に基づく行為は抑制される傾向が生まれるとされる。ミルズ自身が用いている例を挙げるなら、第二次世界大戦中の米国では、「国策への貢献」というナショナリズム的な動機の語彙が繰り返し提

---

<sup>4</sup> たとえば、中河（1999）、赤川（2012）、北田（2018）を参照のこと。また、社会構築主義のアプローチを採用したマスコミュニケーション研究としては、山口（2018）がある。

示され、それと勤勉な労働と結びつけられたのだという（ミルズ 1957: 217）。すなわち、「国策への貢献」という動機の語彙が人びとに内面化され、そこから勤勉な労働という行為がもたらされた一方、「国策への貢献」という動機の語彙では説明しえない行為の抑制が生じたということである。

ただし、ミルズらはそのような動機の語彙を通じた社会統制がつねにスムーズに進むと考えていたわけではない。ミードは社会内部でのコミュニケーションが発達するにつれて、社会のあらゆる成員に「一般化された他者」が共有されるようになり、社会の統合が可能になると考えていた（ミード 1934=1973: 166; 270）。しかし、ミルズらはそうした見解に異を唱え、個々人にとって重要な人間だけが「一般化された他者」の構成に関わるのであり、人びとは自らの社会経済的地位に応じて異なる「他者」を受け入れていくと主張する（ガス／ミルズ 1970: 110）。したがって、地位が違えば異なる動機の語彙が内面化されるのであり、状況いかんでは社会秩序と整合しない行動が大規模に発生するという可能性も考えられる<sup>5</sup>。いずれにせよ、ミルズの「動機の語彙」論において、動機は他者とのコミュニケーションのなかで選択的に語られるものとしてのみならず、それが内面化された結果として本当の動機になりうるものと考えられていたのである。

ミルズのこうした見解に対しては、ダリオ・メロッシのように社会統制の手段としての動機づけに注目した先駆的業績として積極的に評価する論者も存在する（メロッシ 1992: 272）。だが、「動機の語彙」論の視座を取り入れた論者の多くは、レトリックとしての動機の分析へと向かい、ミルズらの内面化についての議論を否定的に評価した。内面化という発想はレトリックとしての動機と本当の動機という区別を持ち込んでしまい、一種の理論的後退であると判断されたのである（Blum and McHugh 1971: 102; 西川 1991: 73）。そのため、内面化や本当の動機にかんする議論は棚上げされ、レトリックとしての動機の語り人が人びとのコミュニケーションのなかでいかなる役割を果たしているのかに焦点が当てられることになった。

たとえば井上俊は、規範的秩序のみならず認知的秩序を防衛するために「動機の語彙」が選択されうる可能性を論じている（井上 1997: 32-33）。「国策への貢献」に典型的に示されるように、社会的秩序の遵守を示すために動機が選択的に語られうることをミルズは強調したが、そればかりではなく「つじつまの合った説明」をするためだけに動機が選択されることもありうるというのである。先に引用したボランティア言説における私的報酬の強調は、「他人のために無償で何かをする」という「つじつまの合わなさ」を理解可能にするための認知的秩序の防衛として解釈することもできよう。

以上のように、「動機の語彙」論は、内面化や本当の動機にかんする分析、さらには人びとの行為を生み出すに至った社会状況に関する問いを放棄することで、コミュニケーションのなかで動機

<sup>5</sup> もっとも、ミルズの大量社会論的な時代診断によれば、マスメディアが人びとに「準拠集団」を提供し、彼らのアイデンティティを形成するようになることで、社会変革のためのポテンシャルは損なわれているとされる（ミルズ 1958: 224）。すなわち、本来であれば個々の社会経済的地位に基づいて構築されるべき「一般化された他者」が、実存から遊離した一般的なものとしてしか構築されなくなり、自らの日常生活の問題とより大きな社会構造とを関連づけて考えられなくなってしまっているということである。

の語りが果たす役割に焦点を当てた研究領域を切り開いてきた。そして、動機へのこうしたアプローチがきわめて有効な領域の一つがメディア研究なのである。これまで論じてきた「動機の語彙」論がおもに個人が自身の動機をどう語るのかに注目してきたのに対し、メディア研究の場合、その関心はメディアが他者（報道対象）の動機をどう語るのかに向けられるという相違点は存在する（前掲論文: 39）。しかし、個人の内面に存在するものとしての動機よりもむしろ、コミュニケーションのなかで選択され、語られるものとしての動機に注目するという点において両者は共通しているのである。

### 3 メディア研究における動機の問題<sup>6</sup>

動機の語りに注目するメディア研究について、ここでは政治的シニシズムにかんする研究と犯罪報道についての研究に注目することにしたい。これらはそれぞれ大きく異なる研究領域であり、動機の解釈という観点からすれば、前者は集合体としての政治家や官僚がもつイメージに起因する動機解釈を問題視するのに対し、後者では容疑者または犯罪者自身の行為にかんする動機解釈が中心となる<sup>7</sup>。とはいえ、いずれの領域においても、動機がメディア上でいかに語られるのかが重要な分析対象となっている。

本論の冒頭でも述べたように、政治不信の高まりとシニシズムとの結びつきは頻繁に語られてきた。一例を挙げるなら、2012年の米国大統領選挙の勝利演説でオバマ大統領（当時）は次のように述べている。

---

<sup>6</sup> 本章の一部は、拙著『ナショナリズムとマスメディア』の第6章での議論を敷衍したものである。

<sup>7</sup> 北田暁大は動機の解釈について、問題となった行為の目的を示すもの（目的動機）と、その行為を引き起こした理由を示すもの（理由動機）に加えて、その行為が行われた状況を越えて外部から持ち込まれるものという類型を提示している（北田 2018: 175）。北田が用いている例に倣うなら、授業中に生徒が大声を発し、教師がそれを自分にたいする侮辱だと受け取ったとしよう。しかし、叱責された生徒は、大声を発したのは後ろの席にいる悪友によって脅されたからだと言ったとする。ここでは教師の側による解釈（自分を侮辱するために大声を発した）が目的動機であり、生徒の側による弁明（悪友に脅されたために大声を発した）が理由動機である。ただし、教師が普段の言動から生徒にたいして強い偏見を持っているような場合、そこで行われる動機解釈は必ずしも大声を発したという行為だけに起因するとは限らない。「こいつはもともと、こんなヤツだから」という思い込みがその状況の外部から持ち込まれ、動機解釈が行われうるのである。この分類に沿ってシニカルな政治報道と犯罪報道との相違について論じるなら、シニカルな政治報道において問題とされるのはまさしく、「こいつらはもともと、こんなヤツらだから」という状況の外部から持ち込まれる動機の語彙である。すなわち、それまでに蓄積されてきた政治にたいするイメージが個々の政治アクターの動機の解釈を決めてしまうということが問題視される。対して、犯罪報道の場合、中心になるのは個々の犯罪行為であり、その行為に関して目的動機や理由動機が語られることになる。もっとも、たとえばマイノリティ集団に属する人物が犯罪に手を染めた、もしくはその疑いがあると報じられるような場合、状況の外部から動機の語彙が持ち込まれるケースは珍しくない。その意味では、ここで述べたシニカルな政治報道と犯罪報道の相違はあくまで程度の差である。

政治的なキャンペーンが時に矮小で、馬鹿げているようにすら見えることがあるのを私は知っている。そのことが、政治とはエゴの競争あるいは特殊利益の領域以上のものではないと語る冷笑家たち (cynics) に豊富な餌を与えている。…われわれはテレビ批評家が考えるほどにシニカルではない<sup>8</sup>。

この引用文からも明らかなように、政治にたいするシニシズムの蔓延においてマスメディアは重要な役割を果たすとされてきた。事実、権力監視を自らの責務とみなすジャーナリズムは、しばしば政治家や官僚の行動に隠された動機を暴き、その腐敗を明らかにしようと試みる。この点について、コミュニケーション研究者であるジェームズ・ケアリーは次のように述べている。

ジャーナリズムは表面的なものの背後にある「真の」動機の仮面を剥ぎ、それを暴露するようになる。権力、富、統制が人びとの行為の主たる目的とされる。なぜなら、あらゆる人びとが利己的な利益によって衝き動かされているとわれわれは想定するからだ。こうした強迫的な説明は、共通善あるいは公共の利益のために動機づけられることが誰しもあるという可能性を排除する。…もっとも一般的な意味において、強欲は全てを説明するのである。(Carey 1986: 187)

無論、この指摘は政治権力を監視し、その腐敗を暴露するジャーナリズムの役割を否定するものではない。しかし、政治家や官僚のあらゆる動向が利己的な利益追求という動機の語彙によって説明されるようになれば、そこにシニシズムが生じることは避けられない。

その点で興味深いのが、英国の政治学者であるマシュー・フリンドグースによる指摘である。フリンドグースは『政治の擁護』(2012年)という小著においてマスメディアが政治的シニシズムの拡散に大きな役割を果たしているとしたうえで、次のように述べている。

メディアの役割とその権力に疑問を呈する政治家は、何かを隠蔽しようとしている、もしくは自分自身の失敗への批判を転嫁しようとしているといういずれかの理由ですぐさま非難される<sup>9</sup>。対照的に、メディアと成熟した関係を発展させようと試みる政治家は、「スピン」やメディア操作に執念を燃やす存在としてカリカチュア化されてしまう。あたかも、自分たちが下した決定に関するメッセージもしくは説明をなるべくそのままの形で公衆へと届くようにした

<sup>8</sup> BBC News 2012, 11,7 (<http://www.bbc.com/news/world-20236369>) [2018/12/25アクセス].

<sup>9</sup> ただし、政治家や軍人が自らの失敗を糊塗するためにメディアによる「プロパガンダの悪影響」を持ち出すというケースは実際にありうる(津田 2018: 28)。したがって、ここでのフリンドグースの指摘は、一般論としてではなく、ケースバイケースで判断すべき事象だと考える。



いというインセンティブが彼らには存在しないかのごとくである。(Flinders 2012: 145)

すなわち、政治家がマスメディアを批判しようとも、あるいはマスメディアと良好な関係を築こうと試みても、いずれにせよその背後には「邪悪な動機」が存在するとされてしまうというのである。こうした状況のもとでは、上述のオバマ元大統領のように政治家がマスメディアによる政治的シニシズムの拡散を批判したとしても、それ自体がシニカルに反論されてしまいかねない。

マスメディアとシニシズムとの関係について、より包括的な分析を行っているのがジョセフ・カペラとキャスリーン・ジェイミソンの『政治報道とシニシズム』(1997年)である。この著作は政治報道を、政治の争点を紹介する「争点型」と、政治アクターが自らの目的を達成するために用いる戦略に焦点を当てる「戦略型」とに区別する。選挙にかんする報道であれば、各党の政策の違いを取り上げるのが争点型、それぞれの政党が勝利のために展開する選挙戦略に注目するのが戦略型ということになる。彼らは、後者のタイプのテレビ報道が視聴者に政治的シニシズムを蔓延させているのではないかという観点から、実験などの手法によりその影響を検証し、次のように結論づけている。

公衆は、公職に就く者が公共の福利よりむしろ自己利益で動いているという信念を受け入れており、どんな政治活動にも、自己宣伝を見出すようにプライミングされる。ジャーナリストが政治的出来事を戦略型で枠づけるとき、彼らは既存の信念や知識を活性化しているのであり、それらを作り出す必要はないのである。(カペラ/ジェイミソン 2005: 298)

すなわち、戦略型の報道は政治的シニシズムを一から作り上げているというよりも、人びとがもともと有しているそうした発想を「補強」しているということになるだろう。メディア報道と政治的シニシズムとのこうした関係については他の研究者によっても検証が試みられており、政治アクターの戦略が伝えられる場合でも、その目的が実質的な問題と関わっている(すなわち自己利益の追求ではない)場合には、シニシズムに寄与しないという知見などが報告されている(Adriaansen et al. 2010: 447)。以上のように、政治的シニシズムとメディア報道との関係についての研究では、政治アクターの動機解釈をめぐる問題が重要な位置を占めているのである。

他方、犯罪報道における動機の分析も、興味深い知見を生み出してきた。その大きな理由として、犯罪報道では加害者の動機についての語りがしばしば重要な位置を占めることが挙げられる。たとえば介護殺人のように人びとが共感しやすい動機が語られる場合、加害者の苦悩や苦しみが大きく報道され、結果的に減刑を求める声が大きくなりがちである。他方、アルペール・カミュの小説『異邦人』(1942年)の主人公ムルソーが殺人の動機として「太陽のせい」という理由を語り、人びとの嘲笑を生んだように(カミュ 1954: 131)、納得し難い動機の語りは往々にして強い反発を生み出す。

たとえば、1999年4月に発生した光市母子殺害事件の場合、加害者の元少年は裁判において、

被害者女性と自殺した実母とを重ね合わせ、「頭を撫でてもらいたかった」と思い抱きついた、遺体を陵辱したのは「生き返らせるため」、遺体を押入れに隠したのは「ドラえもんがなんとかしてくれるという考えがあった」といった動機を語り、大きな反発を呼んだ<sup>10</sup>。別の事例として、2005年11月に発生した広島女児殺害事件において加害者男性が「悪魔が自分の中に入ってきて体を動かした」という動機を述べ、多くの非難を生んだ事件を挙げることもできよう<sup>11</sup>。これらの事例が示すように、犯罪の動機の語りにおいて重要なのは第三者が納得できるかどうかなのであり、劇作家の別役実はこの点について『動機』の良し悪しは、その『わかりやすさ』にかかっている。…この場合の『わかりやすさ』は、犯人のためというよりは、捜査官とそれを取り巻く我々のために必要なことだ」と述べている（別役 2001: 51-52）。

ただし、「わかりにくい動機」がつねに反発を生じさせるわけではなく、むしろ歓迎される場合があることも見逃されるべきではない。1988年からその翌年にかけて発生した東京・埼玉連続幼女誘拐殺人事件の場合、裁判において検察側は犯行の動機として、加害者は自らのコンプレックスから成人の女性に話しかけることができず、代償的に幼女を誘拐、殺害したと主張した（芹沢 2006: 84-90）。しかし、加害者の男性はそれを否定し、事件が「全体的に、醒めない夢を見て起こった」と語った。加害者のこうした主張を当時の言論人は歓迎し、それをもとに様々な「時代診断」を行ったとされる。すなわち、この事件は単なる個別の事件としてではなく、時代の潮流を反映したものとみなされ、その動機に分かりづらさこそが社会の病理を象徴していると論じられたというのである。芹沢一也はこうした動機の語り歓迎された背景には、ノンフィクション作品『FBI心理分析官』や映画『羊たちの沈黙』に代表される、異常心理への社会的関心の高まりがあったとの指摘を行っている。

そして、このような動機に分かりづらさを象徴する言葉としてしばしば用いられるのが、「心の闇」である。鈴木智之はもともと文学や映画の作品紹介において用いられていたこの言葉が、いかに犯罪報道において用いられるようになったのかを検証し、その用法に込められた「ダブルバインド」について、以下のように論じている。

この（「心の闇」という：引用者）言葉が持ち出されてくるときには、行為主体の「心」が、“理解されるべきもの” “解明されるべきもの” として位置づけられながら、同時に、あたかもそれが予定されていたかのように、“理解しきれないもの” “わけのわからないもの” として結論づけられていく。“解明しきれない” ことを前提に“解明せよ” と呼びかける。その点で、「心の闇」はパラノイア的な状況を作り出す装置になっている。（鈴木 2013: 56-57）

しかし、絶対にクリアできないことが前提となっているこうした解釈ゲームに人びとはやがて興味

<sup>10</sup> この事件にかんする週刊誌報道の分析については、津田（2011）を参照のこと。

<sup>11</sup> 『朝日新聞』2005年12月2日朝刊。

を失い、動機の理解を諦めていく。その結果として現れるのは、秩序から逸脱した人間をその文脈を問うことなく排除することで、人びとの「安心、安全」を維持しようとする社会だというのである（前掲書: 157-158）。

以上のように、シニカルな政治報道であれ犯罪報道であれ、動機の語りに注目した研究はさまざまに行われている。それでは、それらの研究にはいかなる意義が認められるのであろうか。ミルズは「動機の語彙」について、人びとを納得させる動機の語りは時代や社会によって変化するという観点から、当時の米国では宗教的な動機の語彙が説得力を失う一方、金銭的な動機や快楽主義的な動機の語彙が支配的になっていると論じている（ミルズ 1971: 352-355）。先に挙げた広島女児殺害事件における「悪魔が自分の中に入ってきて体を動かした」という動機の語りを例にとれば、それは現代日本では説得力を持たずとも、魔女狩りが横行した中世末期から近代初期のヨーロッパでは説得力をもって受け止められていた（森島 1970: 83-123）。それどころか、そうした供述をさせるべく異端審問官は魔女の嫌疑がかけられた人びとに激しい拷問を行っていたのである。このように、メディアにおける動機の語りの分析は、その時代や社会における支配的な人間観を理解する一助となりうる<sup>12</sup>。

ただし、本節で紹介した研究と、前節における「動機の語彙」論に依拠した議論とのあいだには無視しえない相違がある。それは、「動機の語彙」論が本当の動機の解明には踏み込まない方向へと進んだのに対し、本節でみてきた研究は明示的ではなかったとしても「本当の動機」の存在を前提としているという点である。メディア上での動機の語りに関する研究の多くは、そこで用いられる語彙と本当の動機とのズレを問題視しているのである。

政治報道におけるシニシズムにかんする研究は、政治家は報道されるほど私利私欲によって突き動かされているわけではないという前提に立っている。前掲の『政治の擁護』においてフリンドースは、「ほとんどの政治家は、嘘つきでも詐欺師でも悪人でも、あるいは悪魔でもない。彼らは天使でもスーパーヒーローでもない。多くの政治家は実際のところきわめて普通であり、一般的にはかなり退屈な人びとである」と論じている（Flinders 2012: 168）。また、カペラとジェイミソンも、政治家と直接に接触する機会を有する記者のほうが、一般の読者よりも公職者をより正直な存在と考えているという調査結果を引用している（カペラ／ジェイミソン 2005: 39）。したがって政治にたいするシニシズムを緩和するためには、私的利益を強調する動機の語彙のみによってマスメディアが政治家や官僚の行動を論じることの是正が必要だということになる。

他方、犯罪報道の分析において加害者の本当の動機を論じることがより困難であるが、それでも

---

<sup>12</sup> 別の事例として、1999年11月に東京都音羽で発生した女児殺害事件を挙げることができる。この事件では、殺害された女児が有名幼稚園に合格した一方、加害者の長女が不合格となっていたことが判明し、受験の失敗に起因する妬みを動機とする「お受験殺人」ではないかとの報道が行われた（津田 2006: 72）。しかし加害者はのちに、被害女児が合格していたことを知らず、女児の母親との心理的葛藤が原因であったと供述している。「お受験殺人」という動機の語彙が一時的にせよ報じられた背景には、テレビドラマや映画などを通して子どもの受験に加熱する親というイメージが広がっていたことがあると考えられる。

何らかのかたちでそれが前提とされることがある。前掲の鈴木智之の著作の場合、動機理解の不可能性を示す「心の闇」というフレーズの用法に分析の焦点を当てることで本当の動機を論じる必要性を回避している。ただし、たとえば結婚の動機には「相手を幸せにしたい」「母を安心させたい」等々、複数の“本心”がありうるとも論じ、人間の行為がつねに単一の動機に基づいているという前提の解体を試みている（鈴木 2013: 86）。その意味では、たとえ複数であっても本当の動機の存在という前提が否定されているわけではない。

以上のように、「動機の語彙」論の潮流とは異なり、マスメディア報道における動機の語りにかんする分析では、本当の動機の存在が前提とされ、そこからのズレがしばしば問題視されてきたのである。そして近年においては、本当の動機の解明をより全面に押し出した議論が展開されるようになってきている。それが次節で検討する「他者の合理性」にかんする主張である。

#### 4 パターナリズム批判と「他者の合理性」

本論でこれまで述べてきたように、他者の本当の動機の解明を研究の主たる対象から外すことにより、さまざまな研究が可能になった。しかし、メディア研究における動機にかんする研究がそうであったように、本当の動機が論じられていなかったとしても、語られた動機は本物ではないという暗黙の想定が入り込んでいる研究は少なくない。その意味では、他者の心を理解できるという前提から逃れられてはいないのである。むしろ近年では、その前提を正面から受け止めるべきだとの主張が行われるようになってきている。岸政彦らにより展開される「他者の合理性」にかんする議論がそれに該当する。ただし、他者の合理性という概念の含意を理解するにあたっては、パターナリズム的な社会理論の問題点にまず触れておくことが有意義であろう。

ここで言うパターナリズム的な社会理論とは、観察者は観察対象となる当事者自身よりも後者にとつての「真の利益」を正確に把握できるという前提に立った理論を指す。典型的なものとしてはネオマルクス主義の視点から展開された「虚偽意識」にかんする理論がある<sup>13</sup>。この理論によれば、資本主義社会の不平等で抑圧的な構造を人びとが認識するのを妨げるものとして虚偽意識は作用しており、それを打破することでたどり着くものが「真の利益」だと想定されている。このような発想は政治的立場を問わず現れるのであり、たとえば近年の日本の保守論壇においてしばしば展開される「GHQのウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム（WGIP）によって、戦後の日本人は自虐的な歴史観を植え付けられ、誇りを失ってしまった」という主張も、同型の論理に立脚していると言えよう<sup>14</sup>。

<sup>13</sup> こうした立場にたつ論者としては、たとえばハーバート・マルクーゼを挙げることができる。マルクーゼによれば、テクノロジーによる統制が進歩した社会においては、人びとは真の人間のあり方から自分たちが疎外されているという事実すらも気づくことができないとされる（マルクーゼ 1974: 29）。なお、こうした議論のパターナリズム性を指摘している著作としてトムリンソン（1993）がある。

こうしたパターンリズム的な発想がとりわけ表出しやすいのがメディア研究である。人びとの意識を捻じ曲げ、彼らにとっての「真の利益」を認識することを不可能にしてしまうという観点から、メディアがもたらす悪影響を批判する議論は数多く展開されてきた。この場合、メディアによる情報操作を批判する論者は、情報操作によって自分自身の利益を理解できなくなっている当事者よりも知的に優越した立場にあるとされる。そのような知的優越性ゆえに、メディアの「嘘」を見破り、当事者の「真の利益」が歪められてしまっていることに気づけたという前提がそこには入り込んでいるからである。

しかし、「真の利益」にかんするこうした議論の大きな問題は、それが一面的な「合理性」に依拠している可能性を否定できない点にある。すなわち、それはあくまで外部の観察者から見た限りでの「真の利益」でしかなく、当事者にはまったく別の利益が見えている可能性があるという点である。実際、当事者が置かれた状況のごく一部しか目にしない観察者が、当事者自身よりもその利益にかんする合理的判断をなすうか否かは定かではない。それどころか、観察者による「真の利益」にかんする判断には、観察者自身の価値観やイデオロギーが容易に混入してしまう。この点について、岸とともに質的社会調査のテキストを執筆した石岡丈昇は次のように述べている。

最も問題があるのは…「他者の不合理性」を記述する調査です。これに依拠した書物からは、ほとんど学ぶ点がありません。…「他者の不合理性」が強調されて、その裏側には「自己（＝書き手）の合理性」が前提にされています。こうした「他者の不合理性」（と「自己の合理性」）を前提とした参与観察からは、調査者自らの「ものの捉え方」がバージョンアップされることがありません。調査以前より保持している「ものの捉え方」を投影しているだけなのです。（石岡 2016: 147）

岸政彦によって展開される「他者の合理性」にかんする研究は、このような観点からパターンリズム的な主張を批判し、一見すると非合理的にみえる他者の行為の背後に存在する合理的な動機の解明を目指しているといえよう。「合理性」という言葉の意味は必ずしも明快ではないが、①他者が置かれている状況を踏まえれば、観察者にとってその行為の意味を理解することは可能である、②他者にとって広い意味でポジティブな結果（効用の最大化）をもたらす、といったことを指しているように思われる（岸ほか 2018: 103, 112, 117）。①は観察者の側からみた合理性、②は他者自身にとっての合理性であるが、①が成立するのであれば、②もまた成立するはずだという論理になっている<sup>14</sup>（前掲書: 360-361）。具体的な例としては、生活保護を受けてアパートに入居したにもかかわらず、そこを出てまた公園でのホームレス生活に戻った女性の行為について、その女性が

---

<sup>14</sup> このような歴史観に立脚した著作は数多く出版されているが、なかでもメディアの役割に注目したものとして櫻井（2002）を挙げることができる。また、実証的な観点からこうした歴史観を批判的に検証した研究として賀茂（2018）がある。

置かれている状況に沿ってみれば観察者がその動機を理解することは可能であり、かつその女性本人にとって損ばかりを生じさせているわけではないとされる（前掲書: 137）。

こうした主張を掲げるにあたって、岸が主たる批判対象としているのは、質的社会調査におけるアプローチの一つである「対話的構築主義」である。だが、それと同時に他者の語りをパターンナリズム的に無効化してしまう発想も厳しく批判している（岸 2018: 71-74）。その具体例として岸が取り上げているのは、「差別された経験は全然ありません」と語る被差別部落に暮らす女性について、社会学者の八木晃介が行った解釈である。八木はこうした語りについて、被差別部落から外に出たことがないという状況を生み出した社会構造によって女性が「感性力や認識力を…剥奪されてしまった」ためになされたものと解釈する（八木 1992: 57）。言い換えるなら、女性は自身が差別されているという事実を認識すべきであるのに、構造的差別によって生み出された一種の「虚偽意識」によってそれができなくなってしまうというのである。岸が批判するのは、こうした解釈を採用することで他者を「徹底的な無能力者」とみなしてしまうパターンナリズム的な態度なのである<sup>15</sup>（岸 2018: 74）。

岸は、社会構造を持ち出すことで他者自身の語りを否定するという方向性も、あるいは構築主義

---

<sup>15</sup> ただし、①と②をこのように組み合わせることで「他者の合理性」を想定する方法には、研究者が合理性の有無を判定する立場になるというパターンナリズム的構図を回帰させてしまう可能性もあるように思われる。まず、①には、対話ができている以上、他者は基本的に合理的な存在だという前提があり（岸 2018: 101-103）、研究者に求められるのは調査を通じてその行為の合理性を理解することだと考えられる。だが岸は、あらゆる行為が理解可能だとしているわけではなく、通り魔や無差別殺人などについては理解できないことを認めている（岸ほか 2018: 139）。この場合、①が成立しない以上は、②も成り立たなくなり、そこに「他者の合理性」は存在しないことになる。だが、岸も引用しているマックス・ウェーバーに依るならば、理解可能なものとそうでないものとの境界は流動的であり（ウェーバー 1990: 10-11）、ある研究者からすれば①が成立するよう見えても、別の研究者からすれば成立しないという判断が導かれる可能性があることになる。すなわち、理解可能性について万人に共通する尺度がない場合、個々の研究者が合理性の判定者として位置づけられてしまいかねないのである。無論、岸はこうした問題に無自覚であるわけではなく、理論的な水準では、①について「人間にとって普遍的な基準に照らして理解可能なものである」と規定し（岸ほか 2018: 103）、個々の研究者が合理性の判定者になってしまう可能性を否定する。他方、実践的な水準では、「理解できない他者」に対しては求める理解の水準を下げ（研究者の側の解釈図式を無理にあてはめない）、他者の語りの記述に徹することで（前掲書: 142）、合理性の判定者になることを回避しているように思われる。しかし、これらの方策によって上記の問題が回避できるか否かは判断の分かれるところであろう。

<sup>16</sup> 岸は八木のこうしたパターンナリズム的な主張を厳しく批判するが、後者の問題意識には汲むべき点も存在するように思える。八木がここで重視しているのは、被差別部落のなかに「差別されたことがない」という語人がいるということだけではなく、反差別運動に強く反対する人びとがいるという事実である（八木 1992: 58）。すなわち、八木の重大な問題意識は「差別されたことがない」という主張の真偽というよりはむしろ、反差別運動に対して当事者の一部から生じる反対の声とどう向き合うべきかということなのである。こうした反対論には研究者が部落差別の問題に取り組むことへの批判も含まれるとするなら、パターンナリズムの問題を回避することはより困難になるとも考えられる。

のように他者の語りの真偽を問わないという方向性もとらない。無論、「差別されたことがない」という当事者の語りをもって、部落差別など存在しないと主張することもない。さまざまな過酷さや制約をもたらす社会構造の存在を認めただうえで、そのなかでも自由に、合理的に生きる人びとの生を描き出そうというのである。

言うまでもなく、「他者の合理性」の理解に務めるということは、人びとの本当の動機が理解可能であるという前提がなくてはならない。聞き手を納得させるためのレトリックとしてではなく、人びとを実際に行動へと駆り立てるものとしての動機がわかるということである<sup>17</sup>。もっとも、岸はそれを簡単に、もしくは完全に達成できると主張しているわけではない。ある対談のなかで岸は「他者のまるとの理解なんか無理だけど、それでも行為の再記述ぐらいはできるだろう」と述べている（岸ほか 2018: 242）。いわば、他人の内面を全体的に把握するといった水準での理解は断念したうえで、特定の行為についてそれが行われた文脈を丹念に追っていけば、その動機の一側面については把握できるという水準での理解の可能性を主張しているのである。

だが、そのような作業が決して容易ではなく、「客観性を欠く」等の批判を招きやすくなるのは自明である。それを意識するほどに、他者の語りを鉤括弧に入れて、その真偽を問わないというアプローチの魅力は増すと見える。だが、そうしたアプローチを採用することで失われてしまうものもまた存在する。最後にその点について論じることで、本論の結びとすることにしたい。

## 5 「下衆の勘ぐり」の極北

作家の百田尚樹は、2015年6月の自民党若手議員らを対象とする勉強会において、以下のような発言を行ったとされる。

もともと普天間基地は田んぼのなかにあった。周りに何も無い。基地の周りが商売になるということで、みんな住み出し、いまや街の真ん中に基地がある。騒音がうるさいのはわかるが、そこを選んで住んだのは誰やと言いたくなる。（安田 2016: 27）

すなわち、普天間基地の周囲に人が移り住んできたのは「カネ目当て」だということである。それゆえに、基地がもたらす様々な被害に苛まれるのも自己責任だという論理も垣間見える。この暴言に対しては、普天間周辺には戦前からすでに集落があったことなどが指摘されているが、ここで注目

---

<sup>17</sup> レトリックであることは必ずしも虚偽であることを意味せず、複数ある本当の動機のなかで、相手を納得させやすそうなものを強調して語るというケースも多いと思われる。しかし逆に、レトリックとしての動機の語りは本当の動機だという前提を置くなら、「動機の語彙」論の意義は大きく損なわれるはずである。語られる動機と本当の動機とのあいだにしばしば距離が生まれるという前提が、この議論の「あるある感」を増していると考えられるからである。

したいのは語り手にとって目障りな他者に向けられたシニカルな動機の語りである。

本論でみてきたように、このような動機の語りは百田にのみみられるわけではない。本論の冒頭でも紹介したはずみとしこのイラスト集には、他人にたかることこそが難民の動機だとするもののほか、元従軍慰安婦の女性の訴えの動機を「カネ目当て」だとするもの、日本に帰化した人びとの動機を「日本を内側から変えることで祖国に貢献する」ためだとするものなどが収められている（はずみ 2015）。それらの共通点は、描かれている人びとの動機がことごとく歪んだものとして語られている点にある。無論、まともな調査をした痕跡は皆無であり、それらを描いた者の世界観を反映しているにすぎない。あえて強い言葉で言えば、「下衆の勘ぐり」の極北にあるイラスト群である。

しかし、当事者の語りを鉤括弧に入れ、その真偽を問わないというアプローチは、こうした「勘ぐり」に対抗しうる言葉をもたない。動機をレトリックとしてのみ位置づける限り、当事者自身による動機の語りも、百田やはずみの語りも等価なものとして扱わざるをえないからである。

それに対し、岸政彦は普天間基地の近隣で4年ほど暮らしている女性への聞き取り調査をもとに、「カネ目当て」といった言葉では到底理解しえない生活の事情や複雑さ、心情を描き出している。この女性によって語られている言葉は、政治的なイデオロギーから導出される動機の語彙の軽薄さを見事に浮かび上がらせている。

いろいろな条件のなかで、私たちだったらひとり暮らしの母もいて、介護も間近になりそうだからってこういう状況があって、仕事も続けていかないといけなくて、そうしたら、（自宅を構えた：引用者）高速エリアってというのはやっぱり最重要ポイントだったんですね。…暮らさないとわからないことだとか、生活しているひとたちにとっての生活リズムとか、そういう論理でしか生活は成り立っていかないじゃない？ だけど、沖縄のこととか普天間のこととかそういう論理で見ないひとたちって、大量にいるじゃない。で、そういうひとたちにとってみれば、ここはあれだよ、生活者がいる場所じゃないよね。だから、そういうときに、なんか何でも言えて、言葉だけで暮らしのことを言ってしまうみたいな感じ。（岸 2018: 299-301）

政治的なイデオロギーによって単純化、矮小化された動機の語彙に対抗するためには、このように聞き取りを行い、それをおおむね正直なものとして受けとめていくよりほかない。それをしない限り、イデオロギー的に導出された動機の語彙に対して質的に優越する語りを提示しえないからである。

ただしこれは、人びとが共感しうる「善き動機」のみを取り上げるべきだということを意味しない。筆者が別稿で述べたように、読者の共感を求めて美化された動機の語彙のみを提示することは、その反動として「邪悪な動機」を語ることの魅力をかえて高めてしまう（津田 2016: 273）。むしろ、鈴木智之による先の指摘にもあったように、一つの行動の背後には複数の“本心”が存在しうるものであり、そこには利己的なものもあれば、利他的なものも含まれうる。「下衆の勘ぐり」に対



抗するうえで必要なのは、他者のなかに善きものだけをみる態度ではなく、そうした複雑さをも許容しうる人間観の涵養ではないだろうか。

また、岸らのアプローチの必要性を認めることは、レトリックとしての動機の語彙の分析が不要だということも意味しない。上述のように、どのような動機の語彙であれば人びとは納得するのかという視座は、社会のありようを理解するうえで有用だからである。むしろ、「他者の合理性」から生み出される動機を明らかにしていく作業と、メディア上で語られる動機の語彙を分析する作業とが協働し、両者の乖離を明らかにしていくことが、イデオロギー的な動機の語彙を解体していくためには求められるはずである。

しかし、このように人びとが語る動機をおおむね正直なものとして受け入れることと、時として動機がレトリックとして語られうるのを認めることを両立させるのは決して容易ではない。そのような分析はすぐに、分析者のフレームワークにとって都合のよい動機が正直なものとなみなされ、都合の悪い動機がレトリックとして処理されているのではないかという疑念を引き寄せることになるだろう。言い換えれば、本当の動機とレトリックとしての動機との説得的な区別が求められるのである。

本稿でそれを理論的に考察するための用意はないが、実践的にはそこで必要になるのは「ディテール」ではないかと思われる。レトリックとしての動機は、まさにそれが他者を納得させるべく語られるがゆえに、定型的なものになりやすい。本稿でみたように定型的でない動機の語彙は、人びとの反発や憤りを生じさせかねないからである。対して、正直なもの認められうる動機の語りには、定型には還元されない詳細な部分がある。定型的な語りには不要であり、邪魔であるがゆえに、ディテールにこそ事実は宿るとも考えられるのである<sup>18</sup>（岸 2018: 165）。

言うまでもなく、このような区別がつねに有効だということはない。他者を欺こうとする場合、話になるべく具体性をもたせるべきだというのは広く知られた技法である。したがって、ディテールに富んだ嘘という可能性はどこまでいっても残る。人の心を覗く術がない以上、本当の動機とレトリックとしての動機を完全に切り分ける手段は存在しない。だが、それを可能な限りの妥当性をもって行うのに必要なのは、真摯な調査と、そしておそらくは世界にたいする信頼である。

## 参考文献

赤川学（2012）『社会問題の社会学』弘文堂。

石岡丈昇（2016）「参与観察」（岸政彦ほか『質的社会調査の方法 他者の合理性の理解社会学』有斐閣）。

井上俊（1997）「動機と物語」（井上俊ほか編『現代社会の社会学』岩波書店）。

---

<sup>18</sup> 筆者は別稿でプロパガンダとジャーナリズムとの相違として、前者が辺見庸の言う「反逆する風景」を許容しない点を挙げた（津田 2019, 近刊）。すなわち、語りの筋にそぐわないディテールの混入をプロパガンダは許さないということである。ここで取り上げるディテールにかんする議論は、それをやや異なる角度から論じるものである。

- ウェーバー, M. (1990) 海老原明夫ほか訳『理解社会学のカテゴリー』未来社。
- ガース, H./ミルズ, C.W. (1970) 古城利明ほか訳『性格と社会構造 社会制度の心理学』青木書店。
- カペラ, J.N./ジェイミソン, K.H. (2005) 平林紀子/山田一成監訳『政治報道とシニシズム 戦略型フレームリングの影響過程』ミネルヴァ書房。
- カミュ, A. (1954) 窪田啓作訳『異邦人』新潮社。
- 賀茂道子 (2018) 『ウオー・ギルト・プログラム GHQ情報教育政策の実像』法政大学出版局。
- 岸政彦 (2018) 『マンガと手榴弾 生活史の理論』勁草書房。
- 岸政彦ほか (2018) 『社会学はどこから来てどこへ行くのか』有斐閣。
- 北田暁大 (2018) 『社会制作の方法 社会は社会を創る, でもいかにして?』勁草書房。
- キツセ, J./スペクター, M. (1990) 村上直之ほか訳『社会問題の構築 ラベリング理論をこえて』マルジュ社。
- 櫻井よしこ (2002) 『GHQ作成の情報操作書「真相箱」の呪縛を解く』小学館。
- 鈴木智之 (2013) 『「心の闇」と動機の語彙 犯罪報道の1990年代』青弓社。
- 芹沢一也 (2006) 「凶悪犯罪の語られ方」(浜井浩一/芹沢一也『犯罪不安社会 誰もが「不審者」?』光文社。
- 津田正太郎 (2006) 「ニュースの物語とジャーナリズム」(大石裕編『ジャーナリズムと権力』世界思想社)。
- (2011) 「メディアの物語と表現の自由 光市母子殺害事件をめぐる週刊誌報道を事例に」(駒村圭吾・鈴木秀美編『表現の自由II 状況から』尚学社)。
- (2016) 『ナショナリズムとマスメディア 連帯と排除の相克』勁草書房。
- (2018) 『「聴く」プロパガンダ 第二次世界大戦時における英国のプロパガンダ政策(上)』(『社会志林』65巻3号, pp.25-54)。
- (2019) 「プロパガンダとジャーナリズムの間 第二次世界大戦時の英国における『真実』のマネジメント」(『ジャーナリズム&メディア』(12号, 近刊)。
- トムリンソン, J. (1993) 片岡信訳『文化帝国主義』青土社。
- 中河伸俊 (1999) 『社会問題の社会学』世界思想社。
- 西川珠代 (1991) 「社会学における『動機』概念の変容 ウェーバーの動機理解と『動機の語彙』論の動機付与」(『ソシオロジ』36巻1号, pp.63-79)。
- 仁平典宏 (2011) 『「ボランティア」の誕生と終焉 <贈与のパラドックス>の知識社会学』名古屋大学出版会。
- はすみとしこ (2015) 『そうだ難民しよう! はすみとしこの世界』青林堂。
- ヘイ, C. (2012) 吉田徹訳『政治はなぜ嫌われるのか 民主主義の取り戻し方』岩波書店。
- 別役実 (2001) 『別役実の犯罪のことは解読事典』三省堂。
- マルクーゼ, H. (1974) 生松敬三ほか訳『一次元的人間』河出書房新社。
- ミード, G.H. (1973) 稲葉三千男ほか訳『精神・自我・社会』青木書店。
- ミルズ, C.W. (1957) 杉政孝訳『ホワイト・カラー 中流階級の生活探究』東京創元社。
- (1958) 鶴飼信成ほか訳『パワー・エリート(下)』東京大学出版会。
- (1971) 田中義久訳「状況化された行為と動機の語彙」(C. W. ミルズ, I. L. ホロビッツ編, 青井

- 和夫ほか監訳『権力・政治・民衆』みすず書房。
- メロッシ, D. (1992) 竹谷俊一訳『社会統制の国家』彩流社。
- 森島恒雄 (1970) 『魔女狩り』岩波書店。
- 八木晃介 (1992) 『部落差別論 生き方の変革を求めて』批評社。
- 安田浩一 (2016) 『沖縄の新聞は本当に「偏向」しているのか』朝日新聞出版。
- 山口仁 (2018) 『メディアがつくる現実, メディアをめぐる現実 ジャーナリズムと社会問題の構築』勁草書房。
- Adriaansen, M., van Praag, P. and de Vreese, C. (2010) 'Substance matters: how news content can reduce political cynicism,' in *International Journal of Public Opinion Research*, vol.22(4), pp.433-457.
- Blum, A. F and McHugh, P. (1971) 'The social ascription of motives,' in *American Sociological Review*, vol.36 (February), pp. 98-109.
- Carey, J. (1986) 'The dark continent of American journalism,' in R. Manoff and M. Schudson (eds.) *Reading the News*, New York: Pantheon.
- Flinders, M. (2012) *Defending Politics: Why Democracy Matters in the Twenty-First Century*, Oxford: Oxford University Press.
- ICF GHK (2013) 'A fact finding analysis on the impact on the Member States' social security systems of the entitlements of non-active intra-EU migrants to special non-contributory cash benefits and healthcare granted on the basis of residence'  
(<http://www.ec.europa.eu/social/BlobServlet?docId=10972&langId=en>) [2019/1/15アクセス].